

# 韓国濟州島の噴火記録と火山灰層序

早川由紀夫（群馬大教育）・藤田明良（天理大国際文化）・  
金 泰鎬（濟州大学校師範大学）・山縣耕太郎（上越教育大）

韓国の濟州島は、東西 70km 南北 30km の楕円形をした火山島である。すべて玄武岩からなり、その中央には標高 1950m のハンラ山がそそり立つ。山頂から海岸まで、どの方向も下に凸の地形をなして裾野を大きく広げている。裾野の標高は低く、そのままなめらかに海に達する。ハワイ島の火山が上に凸の地形をなし、裾野の標高が高く、海にいきなり没することとこれは好対照をなす。この火山が 11 世紀初頭に噴火したと伝える文献史料がある。

基本史料は二つある

韓国濟州島の 1002 年と 1007～1008 年の噴火について従来から基本史料としてよく使われているのは、1451 年に完成した歴史書『高麗史』にみられる次の記事である。

『高麗史』（1451 年成立）巻 55 五行志（三）

穆宗五年六月，耽羅山開四孔，赤水湧出，五日而止，其水皆成瓦石。十年，耽羅瑞山湧出海中，遣大學博士田拱之，往視之。耽羅人言，山之始出也，雲霧晦冥，地動如雷，凡七晝夜，始開霽，山高可百餘丈，周圍可四十餘里，無草木，烟氣羃，其上望之，如石硫黃，人恐懼不敢近，拱之躬至山下，圖其形以進。

あまり知られていないが、11 世紀初頭の耽羅噴火の基本史料にはもうひとつ『世宗実録地理志』の記事がある。これは 1432 年に完成した『新撰八道地志』（現存せず）を、1454 年に編集した『世宗実録』（国王の死後につくられる公式の一代記。これを集成したのが『朝鮮王朝実録』）に付録として載せたものである。内容は 1432 年当時のままと考えられ、年代的には一番古い現存記事である。そこには次のようにある。

『世宗実録地理志』（1432 年成立の記事を 1454 年再掲）濟州牧の靈異条

高麗穆宗五年壬寅六月，耽羅山開四孔，赤水湧。十年丁未，有山湧出海中。耽羅以聞，王遣大學博士田拱之，往驗之。耽羅人言，山之出也，雲霧晦冥，地動如雷，凡七晝夜，始

開霽，無草木，烟氣羃，其上望之，如石硫黃，人不能進，拱之躬詣山下，圖其形以進。

『高麗史』も『世宗実録』も同時代の一次史料ではなく、噴火から 400 年以上経過した時期に編纂されたものである。これらは、当事はまだ残っていた「高麗王朝実録」をはじめとした高麗時代の史料や文献をもとに書かれたと考えられるが、両者の記事に共通する部分が多いことから、素材とした原史料は同一のものだったと考えられる。だが相違する部分も存在する。『世宗実録』の「有山湧出海中。耽羅以聞，王遣大學博士田拱之」は、耽羅からの報告（以聞）があつて、これに対し高麗国王が田拱之を派遣したことを述べているが、この形式の記述は、「実録」によく見られるもので、原史料の表記がそのまま残った可能性が高い。これに対し『高麗史』では、耽羅からの報告に触れないかたちに文章を変整している。また「人不能進」が「人恐懼不敢近」になっているのは、田拱之の勇気を強調するため、文飾をほどこした可能性がある。このように『高麗史』と『世宗実録』では、『世宗実録』ほうがオリジナルに近いと考えられる。

他にも細かい相違はあるが、問題となるのは『高麗史』のみに見える「五日而止，其水皆成瓦石」「瑞山」「山高可百餘丈，周圍可四十餘里」の 3 部分である。これについては、《ア》両者共通の原史料にあつたが『世宗実録』では省略された、《イ》共通の原史料にはなかつたが『高麗史』が別の典拠をもとに付け加えた、《ウ》共通の原史料や他の典拠にはない記述を、『高麗史』が新たに書き加えた、という 3 つの解釈が考えられる。この噴火による田拱之の派遣記事は、半ば独立していた耽羅国が、高麗への服属を強めていく契機として、『高麗史』の中で位置付けられており、この噴火が高麗国王にとっての「祥瑞」であつたという認識を示す「瑞山」は、この段階で明記されたのではないか。このように「瑞山」は《ウ》でなはいかと考えるが、他の 2 つについては、今のところ判断材料がなく、保留する。

「瑞山」はどこか？

『高麗史』の段階では「瑞祥」をあらわす一般名詞として使われていた「瑞山」が、1481年に完成した『東国輿地勝覧』からは固有名詞になるとともに、場所を特定する意図も始まった。『東国輿地勝覧』は、「瑞山」は大静県にあるとした。濟州島は濟州・旋義・大静に分かれるが、大静県は西半分にあたる。

その後、濟州に赴任した官僚たちによって、島の地誌がさまざまな形で作られた。1602年の『南槎録』では、瑞山を飛揚島にあてる説が採用されている。1703年の『南宦博物』は、『東国輿地勝覧』以来の諸説を整理した上で、飛揚島では小さすぎるとし、大静県の盖波（加波）島を候補にあげている。しかし、飛揚島説は根強く、1709年の『耽羅地図并序』で復活し、1750年前後の『増補耽羅誌』でも継承されている。ここでは挙げていないが、以後の地誌も20世紀に至るまで飛揚島説を掲げており、今日の通俗的な言説の背景となっている。

このように現地比定の試みは、噴火から479年後の『東国輿地勝覧』では、大静県というエリアに留まっていたが、500年後の『南槎録』からは、特定の島にあてようとする試みが始まった。『南宦博物』のように「周圍四十餘里」に重きをおくケースもあるが、盖波（加波）島自体も40里、20里、12里と時代によって数値が変化しており、周囲距離を根拠にすることに意味はない。地誌の比定には根拠に乏しいものが多く、噴火地点の特定は、これらの記述に寄りかからないほうが良いと考えられる。

## 21世紀火山学の目で地質調査すると

濟州島の山麓には、何百もの小火山（スコリア丘・タフリング・タフコーン・マール）がある。その中でも、とくに優美な火山地形をなす月郎峰（東部にある標高382.4mのスコリア丘）は、厚さ80cmのクロボクに覆われている。そのなかほどに鬼界アカホヤ火山灰（7300年前）の火山ガラスがみつかる。したがってこのスコリア丘は、1万数千年前の噴火で形成されたことがわかる。鬼界アカホヤ火山灰の上にも濟州島のスコリアが何枚かみられるので、7300年前以降もこの島で噴火が繰り返されたことが確かである。

1000年前の噴火地点を特定する目的で、新鮮な火山地形を有するいくつかの地域で地表直下のクロボクの厚さを観察したところ、ほとんどの場所で数十cm以上の厚

さが確認できた。南西端の松岳山では、1mクロボク/1mローム/タフリング/溶岩/タフリングの重なりがみられた。

ただし北東部の臥山里周辺と西部の新坪里・楮旨里周辺に広がるアア溶岩だけは、ほとんどクロボクに覆われていなかった。このような荒れ地を、現地ではコと呼ぶ。『東国輿地勝覧』が、「瑞山」は大静県にあるとしたことを考慮すると、11世紀初頭の噴火は新坪里・楮旨里周辺に広がるアア溶岩をつくった可能性が高いと考えられる。そのアア溶岩は、標高400m付近から流出して扇形に広がりながら10kmほど流れ下っている。海には達しなかったようにみえる。1007～1008年に海中から湧出した瑞山がどこにあたるかは、まだ不明である。